

# 道の駅への期待

「がん哲学外来」と言っても、あまり聞き慣れない言葉かも知れませんが。多くの人は自分や家族など身近な人ががんにかかって初めて「死」を意識し、これまでいかに生きてきたか、これからどう生きるか、死ぬまでに何をすべきかを真剣に考えます。

医療現場は患者の治療に手一杯で、患者や家族の精神的苦痛まで軽減させるのは難しいのが実情です。「がん哲学外来」は、医療現場と患者の間の「隙間」を埋める目的で生まれました。科学としてのがんを学びながら、がんに関心のある人を取り入れようという立場です。がん哲学外来コーディネーターの養成や「医療の隙間を埋める看護師」の育成も必要です。

この隙間を埋めるため、病院や医療機関だけでなく、集まりやすい場所で、立場を越えて集う交流の場をつくるのがとても大切なことです。最近では、がん哲学外来が「対話の場」であ

## 安心した人生を送れるよう寄り添う



る「メディカルカフェ」として各地に広がり、注目されてきました。

高齢化が進む中で、地方に暮らす人々たちへの地域医療や遠隔医療の重要性が増し、「がん哲学外来」の活動を全国に展開することがますます大切になっていきます。

こう考えたとき、地域に根差し暮らしに欠かせない公的施設として、全国に1000カ所以上を数える「道の駅」こそ、「メディカルカフェ」の全国展開に極めてふさわしい場ではないのか、と気づきました。道の駅は都市圏より

地方に多く、近年は地方創生をはじめ、その果たす役割が多様に広がり、医療的な支援まで期待されている、と聞いています。

道の駅で「がん哲学外来」の話をさせていたただき、「メディカルカフェ」を全国展開する一翼を担っていただけることになるなら、これほどの喜びはありません。

がん哲学外来の目的でもある「がんになっても尊厳をもつて人生を生き切ることのできる社会」を実現したい。多くのがん患者が、さまざまな方と垣根を越えて対話することで、「病気であっても病人ではない」という、安心した人生を送れるように、寄り添っていききたいと思っています。